

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニュースレター

1992 8.1

15

情報知識学会事務局 発行 〒101 東京都千代田区泉町1番地(凸版印刷株内) TEL03(3835)5550 FAX03(3839)6061 ISSN0915 1133

『情報知識学会』総会開催案内

事務局移転等の諸般の事情で延期されておりました、情報知識学会平成4年度通常総会を開催いたします。同時に当学会の副会長であります藤原譲氏(筑波大学電子情報工学系教授)の講演もごさいます。

高度情報化社会では情報、知識が次々と生み出され、消費され、その課程で社会全体の知識体系の再構築が加速度的に行なわれています。こうした新たな動きの中で、情報の創造主体である個人あるいは企業は、常に「情報知識とは何か?」という問いに直面しています。情報化社会の本質にかかわる問題に御関心のある方々の多数の御来聴を歓迎致します。

- 1 日時 平成4年9月17日(木) 講演会 14:00~16:00
総会 16:00~17:00
懇親会 17:00~18:00
- 2 会場 日本科学技術情報センター 千代田区永田町2-5-2
講演会・総会は7階ホール
電話 03-3581-6411
懇親会は喫茶室にて実施

※最寄交通機関 地下鉄丸の内線国会議事堂前駅下車徒歩4分
地下鉄千代田線国会議事堂前駅下車徒歩2分

- 3 議題 ①平成元~3年度事業報告
②平成元~3年度収支決算報告
③平成4年度事業計画
④平成4年度収支予算
⑤役員の選任
⑥その他
- 4 その他 ①講演会 参加費は無料
演題 「情報知識学のフロンティア」(次頁を御参照下さい)
講演者 情報知識学会 副会長 藤原 譲氏
②総会 会員以外の参加を歓迎します
③懇親会 会費 5,000円(当日会場受付へお支払ください)

目次

総会開催案内	1	理事会議事録	10
総会講演案内	2	学会カレンダー	11
点からモノへの生産ライン	3	ビジネス先端レポート「ドキュメントの可読性と品質要件」...	12
電脳翻訳21研究会	5	国際セミナー御案内	14
ゲノム特許の声明文	6	学会誌への投稿	15
特別寄稿 一投書一	8	ニュースレター原稿募集	16

情報知識学会総会講演案内

題目：情報知識学のフロンティア

筑波大学電子情報工学系 藤原 譲

講演概要

データ・知識・情報（以後情報と総称する）は思考活動の対象であり、成果であり、様々な形で利用、処理、記録、伝達されているので、その重要性は古より十分に認識されている。しかしながら、その実体に関する体系的研究は意外に進んでいない。例えば情報関連用語の定義すら確立されているとは言えないのが現状である。

そこで情報の本質を明らかにして、その理解と活用のために必要な基礎理論や技術の発展と体系化を図り、さらに各分野での応用に資するのが情報知識学の向かうところである。今回はその概要につき述べ、識者の検討に供する次第である。

やや詳細に敷衍すれば以下のようなになる。計算機や通信に関する技術の進歩に支えられて、「情報化」が唱えられるようになり、その多くが日々の活動に入り込んでいる。

ところで、こうした技術を活用するにも、対象となる情報そのものの性質を理解し、適切に対処することが重要である。こうした処理、伝達以前の課題、すなわち、情報に対する基礎的体系的考究に取り組むのが「情報学」あるいは「情報知識学」であるとする。

情報はあらゆる分野の知的活動に係わるものであるから、本学会が自然科学的領域の情報問題を扱うに留まらないことはいうまでもない。人文・社会科学的な情報の諸問題も、対象としてきわめて重要である。本学会は、こうした諸分野の研究者の学際的な協力により情報知識学の確立・体系化をめざす。それは同時に、各領域で当面する個別的・具体的問題を会員間で持ち寄って、解決をはかってゆく場でもある。即ち情報知識学はきわめて広な学際的広がりを持つが、核となるべき部分は独立した一つの学問分野である。

具体的な研究の領域は次のように分類される。

- (1) 基礎理論 (キャラクターゼーション、情報構造、モデル、意味、関係、組織化など)
- (2) 資源化 (資料収集・整理、評価、資源化、アクセス、管理など)
- (3) 記述・表現 (記述、表現形式、言語、ターミノロジー、識別性、標準形など)
- (4) 媒体 (物理媒体、論理媒体、記憶媒体、伝達媒体、マルチメディアなど)
- (5) 動態 (変換、伝達、標準化、案内、知的所有権、電子出版、オンラインシステムなど)
- (6) 応用 (図書・情報管理、データベース、知識ベース、問題解決、意志決定など)

また学会の活動としては、国内の関連学協会やCODATA, FID, ICSTI等の国際団体との連携も重視する。

この際、情報の諸問題に携わる方々の積極的関心を期するものである。

以上

点からモノへの”生産ライン”

東京大学人工物工学研究センター 岩田修一

データベースからはモノは生まれない。モノにつなげるためには、素材の提供とともに、料理をする意図と腕前が必要である。いろいろな分野でデータベースが構築され、「データベースの時代」という勇ましいかけ声もかけられるようにはなったが、モノになった例はない。モノをデータベースへと情報化することは試みられても、情報をモノにつなげることはそれほど容易でなかったためである。理由は、現状がモノを分析理解し、データベース化、知識ベース化する”情報化ライン”がようやく形成されつつある段階で、モノにつながる”生産ライン”が形成されていないためである。”生産ライン”形成の困難は、2つの異質のデータベースを足し合わせても一つの新しいデータベースはできないことから容易に想像がつく。敢て乱暴な言い方をすれば、大鏡と源氏物語を合わせても平安時代のデータベースとはならないのである。そこには、人とモノを包含する壮大な坩堝（melting pot）があり、記録され、残されることのなかった数多くの物語があるのである。

そもそも、データベースはデータ点の集合であり、データ点だけからはモノはできないことは明らかである。データ集合が分類され、言葉を与えられ、論理を与えられると知識となり、システム化されると知識ベースとなる。知識ベース化には、データベース化以上に意図が重要である。意図は現物と場によって定義される。現物は過去の成功と失敗の賜である。多くの場合、成功は努力と幸運とによって産み出され、失敗は無知と怠惰に起因する。場は社会と環境とによって形成され、そこには無数の役者とシ

ナリオが存在する。結果としてのパフォーマンスは、時に喜びであり、時に苦渋でもある。演出の楽しさ、もどかしさは、”坩堝”の神秘性に起因する。

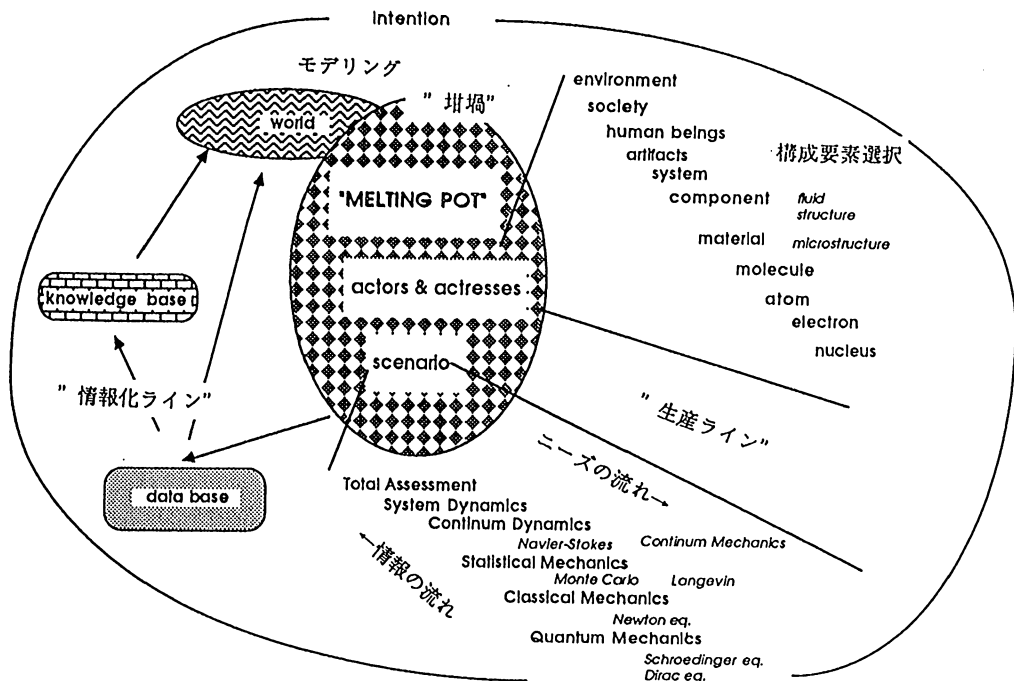
技術の進歩により特定の領域においては格段の生産性が実現した今、現物は社会と環境とに大きな役割を果たすようになってきた。配役が大きく変わり、シナリオの再検討が必要となった。つまり、人が正しく意図して作るモノ、人工物（artifacts）についての”生産ライン”の再検討が必要となったのである。では人工物についての”生産ライン”は、どのように形成されるべきであろうか？それは、これまでの高品質大量生産の技術と異質の体系を持つものなのであるか？それがための（ad hoc）使用価値を具現する”モノ”から未来へのメッセージを内蔵する”壺”（artifacts）への展開には、何が準備されなければならないのか？本稿では、そのような問題提起の基に人工物につながる情報システム、”情報の坩堝”をイメージしてみたい。

自然や人工物を情報システムの中にコピーすることができるか？自然や人工物の無限の可能性と計算機の限定された能力とは大きな隔たりがあり、答えは否である。”コピー”は、特化した目的と対象においてのみ可能となる。目的と対象を正しく視野の中にとらえるための定点となるデータと現物のダイナミックスを上手に表現するモデルとによって、作りもの（artifacts）は臨場感を与えられる。臨場感は、良質の大量データによって与えられる場合もあれば、普遍性のある原理、モデルにより算出されることも

ある。実効性のあるやり方は、両者の上手な併用である。そこでは、不断の改良が期待されている。つまり”生産ライン”は、入手可能な情報に対応して成長しなければならない。

人工物の”コピー”は、さまざまな寸法で与えられる。宇宙地球環境規模のものから、システム、部品、材料、マイクロ組織、原子・分子を経て電子、原子核に至る 10^{20} の広がりを持つ寸法巾である。時間についても、フェムト秒から数千年という広がりを持つため、”コピー”のきめは大きく異なる。理想は途切れることのない”生産ライン”であるが、現実には穴だらけである。いずれにしても、穴埋めは、いつかは完成するより普遍的な理論の開発とその場しのぎの現物合わせを併用することになる。

我々、凡人はモノをつくろうとするとき、その出発点においては、あいまいな意図と限られたデータ、知識、技術しか持ち合わせていない。モノへの具体化は、対象の絞り込み、領域化と汗と涙の試行錯誤によって達成される。無駄射ちは悲しくなるほど多いが、悲しむほどに”serious”な領域化が進み、ブレイクスルーへの準備が整う。図は、そうした無駄射ちの一つかもしれないが、点からモノへの”生産ライン”のスケッチである。来たるべき21世紀への夢のある”坩堝”の実現に寄与できればと考えている。



研究会紹介

電脳翻訳 21 研究会

長瀬産業株式会社
堂野 前進

刻々と変る湾岸戦争のテレビニュースに茶の間にくぎづけになった記憶は、まだなまなましいとおもいます。その時のブッシュ大統領の歴史に残る幾つかの演説をコンピュータで翻訳を実践する試みのなかから電脳翻訳 21 研究会が誕生しました。その成果はブッシュ大統領決断のスピーチとして出版することができました。その後、コンピュータを利用した翻訳に関心のある人々が 21 人集り、21 世紀が来るまで、詰り、1999 年 12 月 31 日まで、電脳翻訳の可能性について研究、実践する場として、コンピュータと人間の頭脳との統合（電脳）、異文化間の交流と相互理解の増進（翻訳）、世紀末から 21 世紀へのかけ橋（21）、利用者として研究、応用、実践（研究）、人と人が出会い、啓発し合う場（会）としての目標を掲げ、下記の活動を行うことを申しあわせました。

（１） 電脳翻訳研究会（年四回）開催。

3、6、9、11 各月の第一土曜日の午後、東京、永田町、海員クラブに於て

（２）電脳翻訳機器の利用、応用研究

研究会と同時、または別途実施

（３）会報の発行（年 4 回）

〔電脳翻訳ニュース〕の発行

2、5、8、10 各月の初旬

（４）電脳翻訳情報の収集、普及

（５）電脳翻訳出版の企画、編集

第一回研究会は本年 3 月 7 日 小島 義郎 早稲田大学教授の〔日本語の意味、英語の意味〕と森口 稔 シャープ研究所員の〔辞書と意味〕をテーマにした発表に続き、参加者全員で意味の問題について討議しました。

第二回研究会は本年 6 月 6 日、翻訳サービス社、社長 馬場 誠一氏の〔翻訳のためのコンピュータ システムの構築〕と N T T P C 社 社長 田中 好夫氏の〔ネットワークの活用（I S D N P C 通信を中心に）〕をテーマにした発表と平行して、東芝 A S T R A N S A C のデモを行い参加者から鋭い質問が多く寄せられました。

次回は本年 9 月 5 日、会員の発表（未定）に続き、会員からの希望の多かった沖電機の機械翻訳システム〔パンセ〕のデモと説明を予定しています。

電脳翻訳研究会の願いは、体系化された知識の枠組みにとらわれることなく、会員全員が、自由に意見を発表し、自分の信念にしたがって行動することにより創造的な情報交流が円滑に進展するよう貢献することにあります。

電脳翻訳 21 研究会について更に詳しいことをお知りになりたい方は、
東京都港区芝大門二丁目 7-5-401 ナカタビル 4 階

電話 03-3459-0071 FAX 03-3459-0688

事務局にお問い合わせください。

国際学術連合のゲノム特許についての声明

国際学術連合(ICSU)は基礎科学の分野の共同研究を促進し、科学の普遍性の原則と科学知識の自由流通を保証する国際的非政府組織である。

当連合はヒトについての遺伝学研究の非常に大きい可能性のある利益を意識し、又この研究から出現する倫理上社会上の諸問題を認識しています。従って、ICSUは遺伝情報の特許とする種々の試みによって、基礎科学の振興及びそのために必要とされる情報の流通の何れをも危険にさらすべきでないと強く確信しています。

ICSUは当連合の所見として核酸の配列情報そのものを特許にすべきでないと確信しています。核酸配列は、その重要性及びその応用面(即ち調節シグナル、アンチセンスRNA、プローブ等)での関連に限って—ただし、遺伝情報の潜在的生産物(即ち蛋白質)に関しては除外し—しかもそのものが先例がなく、自明でなく、しかも有用である場合に限り特許化されるべきであると考えます。

特許とは、単に予測されたものでなく証明された事実に基づいた応用、方法、及び物質を保護するように作られるべきものであり、有用な生産物とサービスを提供するのに必要な投資や発展を刺激し、社会に正常に貢献するものと考えられるものです。従って、このような状況下ではコンプレメンタルDNAの配列(cDNA)の特許申請は、特許そのものを歪曲するものであろうと考えます。このような特許の原則からのいかなる逸脱も、科学の最善の利益に反するものであり、且つ国際協力の努力を妨害するものである。従ってICSUは、未知のメッセンジャーRNA(m-RNA)部分を含むcDNA配列に関する最近の特許申請の結果将来予測されるような、とりかえしがつかない可能性のある決定に対して注意を喚起するものである。

ICSUは、関係諸機関、特に当該分野において特許申請のなされているか近い将来に申請を予定している国の機関に対して、このような申請が、その含むであろう意義を充分考慮し、既に確立された特許の原則を厳正に適用する事を保証し、さらに将来同様の状況が予想される他の国々に対する一つの範例を作ることを強く要請するものである。

ICSUはこの件に関して正式の国際的合意を歓迎するものである。

INTERNATIONAL COUNCIL OF SCIENTIFIC UNIONS CONSEIL INTERNATIONAL DES UNIONS SCIENTIFIQUES

Officers :

Prof. M.G.K. Menon (India), President
Prof. J.C.I. Dooge (Ireland), President-elect
Prof. W.E. Gordon (U.S.A.), Vice-President
Prof. J.W.M. la Riviere (Netherlands), Secretary General
Dr. M. Petit (France), Treasurer



Secretariat :

Executive Secretary: Julia Marfon-Lefèvre
51, boulevard de Montmorency, F-75016 Paris, France
Telephone: (33 1) 45 25 03 29 - Télégrams: ICSU Paris 016
Telex: ICSU 630553 F - Téléfax: (33 1) 42 88 94 31
Email: Omnet ICSU, Paris, ICSU @ FRMOP11.Earn Telecom Gold 10075 : DBX126

ICSU STATEMENT ON GENE PATENTING

The International Council of Scientific Unions (ICSU) is an international non-governmental organization whose mandate includes the promotion of cooperation in the basic sciences, and the safeguarding of the principle of the universality of science and of the free flow of scientific knowledge.

The Council is aware of the tremendous potential benefit of genetic research for humanity and realizes that new ethical and social dimensions arise from this. Accordingly, ICSU strongly believes that efforts to patent genetic information should not jeopardize either progress in the basic sciences or access to the information which is necessary for such progress to continue.

ICSU asserts its view that information about nucleic acid sequences cannot be patented *per se*. Such sequences should be patentable solely within the context of their demonstrated significance and/or application (e.g. regulatory signals, antisense RNAs, probes, etc...) -- and not of their potential products (e.g. proteins) -- and provided that this can be shown to be "novel", "non-obvious" and "useful".

Under such circumstances, patenting of complementary DNA sequences (cDNAs) would distort the patent process, which is designed to protect applications, methods and products, on the basis of proven facts and not mere expectations, and normally serves society by stimulating the investments and developments necessary to provide useful products and services. Any deviation from such patenting principles would run counter to the best interests of science and hinder international collaboration in such endeavours. ICSU therefore cautions against decisions which may be irreversible, such as those possibly emerging as a result of the recent patent requests concerning complementary DNA (cDNA) sequences corresponding to portions of unknown messenger RNAs (mRNA).

ICSU urges the relevant authorities, particularly in countries where patent applications in this field have been or are soon to be filed, to consider such applications taking due account of the possible implications and to ensure a strict application of established patenting principles, thereby setting an example for other countries in which similar cases may arise in the future.

ICSU would welcome a formal international agreement on this subject.

Paris, June 1992

MI F E S マクロによる歴史的表記変換システム「ことだま」開発顛末

齒科醫 高崎一郎

私は個人的に正漢字歴史的假名遣を實踐してゐる。尚古趣味だの偏屈だのとけなされること夥しいが「こちらが正しいのだ」と意地を張ってゐる。考へてみれば、漢字が文化的後進性の象徴と糾弾されたのはさう遠い昔ではない。時代によってこれほど状況が變化するのなら、近い將來に歴史的表記の再登場も十分有り得るだらう。だから初めて日本語ワードプロセッサなるものが完成したと聞き、またJ I S漢字コードを見ていたく感激した。漢字が機械處理できる夢の時代が到來したのみならず、不完全とはいへ歴史的表記も可能ではないか。最初は高價だった機器も、私が大學を卒業する頃は個人で手が届くやうになってきた。先づワープロ専用機を購入し、それにあきたらず翌年にはパソコンに手を広げた。

周知の様に、今日O A機器がここまで身近なものになった最大の功勞者は日本語入力システムである。特にパソコンではF E Pとしてシステムが獨立したため、その發展ぶりがよく知られてゐる。表記の基準となつたのは言ふまでもなく當用漢字現代假名遣であつた。従つて「現代表記の口語日本語文」以外の入力は極めて困難である。どれほど苦勞するか、例へば片假名混じりの法律文でも入力すればよくわかる。つまり内閣告示などより遥かに有効かつ嚴格な「表記統制」社會が實現してしまつたのである。尤も全く逆の可能性もある。歴史的表記のF E Pなら初心者でも抵抗なく文章を綴れるだらうし、卸一發で大量の文獻を書き換へても面白い。今まさに歴史的表記復權の最大にして最後の機會である。そんな妄想を抱きつつ表記変換マクロ「ことだま」の開発を始めた。

ところで貴方は歴史的表記を御存じだらうか。主として古典や戦前期の書物に見られる表記法であることは分るとしても、正確に綴れる人は今や少數派に相違ない。私としては巷間いふほど難しいとは思はないが、適切な入門書・解説書が少ないのは洵に残念に思ふ。

漢字の場合<国→國>のやうな一對一の組合せが多いが、中には<弁→辯・辨・瓣・辯>や<著・着→著>のやうに複數のものもあり、更に<選考→詮衡>など「同音漢字による書きかえ」といふ厄介物がある。また<渋→澁・澀>など一概に正字を定められないものもある。これに比べると假名遣は變化の法則が單純で、理解しやすい。法則を簡潔にまとめておかう。

- ・四つ假名……<ぢづ>→<じず>
- ・ワ行假名……<ゐゑを>→<いえお> ……W音の脱落
- ・拗音假名……<くわ>→<か> ……W音の脱落
- ・長音假名……イ、<あう>→<おう> ……AU→OU
ロ、<いう>→<ゆう> ……IU→YUU
ハ、<えう>→<よう> ……EU→YOU
- ・ハ行假名……語頭以外の<はひふへほ>→<わいうえお> ……H音の脱落
- ・撥音假名……漢字音節の<〇む>→<〇ん> ……あまり實施されない。

字音假名遣(てふてふなど漢字の假名遣)は難物といはれるが、北京語を知つてゐれば大方は推測がつく。その他に縦書き横書き・送り假名・數字表記など枚舉にいとまない。私としては縦書きのエディタや、漢數字の表計算ソフトが欲しいし、時間管理は太陰曆と不定時法にならないものかと思つてゐる(あゝこれぞ偏屈の極み)。

さて最初のパソコンはかの有名な「PC9801VM2」だったから、随分幸せな方だった。約六年の間にメモリ追加、RAM ディスクやハードディスク導入と世間竝に機能を擴充し、更にラップトップ購入と次第に充實してきた。振り返ってみると本當によく持ちこたへたものである。そして幸運の第二弾はエディタ「MIFES」との出逢であった。しかし乍ら「随分變なワープロだな」といふのが第一印象であった。ましてマクロの威力など想像だにできない。便利だと力説する友人の聲は耳をすり抜けるばかりだった。

ここで幸運の第三弾となる。平成に年號が改まった頃、本屋でふと手に取った「MIFESを256倍活用する本(アスキー)」が最終的に運命を切り開いたといつて過言ではない。マクロを活用すると、複数の検索置換を連続実行できるといふ。これだ、と思った。いくら頑張っても自分でFEPなど作れる筈がない。しかし既存の文章を書き換えるのなら比較的簡単である。何よりワープロ感覚で文章作成中に命令を実行できるのが有難い。これ一冊を頼りに勉強が始まった。最初に作った正字變換マクロを動かしてみると、まるでよちよち歩きの幼児のやうで、思はず懐かしくなる。マクロ改良中にCPUはV30 から80386 にまでなり、それにもましてマクロの巧拙で驚くほど能率が上がる。寝ても醒めてもマクロが頭を離れず、すっかり中毒状態になってしまった。

いろいろ問題も多かった。例へばJISコードの半角片假名には「ヰ」「ヱ」が存在しない。それゆゑ鍵盤上にも無い。データ交換のためにコード表の逸脱は禁物だが、かなり深刻な缺陷である。歴史的表記の入出力標準が定まってゐないのも問題である。もちろん歴史的表記は長い歴史を有するため、いろいろ變形があつて不思議ではないが、ソートの結果が何種類も出るやうでは困る。その點、現代表記は文法的にをかしいと言はれ続けながら、四十年の實戦で鍛へられ、細部がしっかり固まってきた感がある。

かうして三年半の間に、歴史的表記環境はかなり實用的なものとなった。漢字や假名遣の變換は元より、桁付漢数字變換や振假名つけまでできるし、ディスプレイ畫面上での縦書表示も可能である。VJEなら辭書を改造して、舊漢字の直接入力さへ出来る。漢字検索には、テンキー上で筆順をなぞると即座に検索される。餘勢をかってNIFTY-SERVEのFGALPK(ライブラリ7)に登録してしまつた。果して何人がダウンロードしてくれるか分からないが、これからも改良充實してゆきたい。最近讀んだ本に「FEPは最も能率的なデータベースだ」とあり感心した。日本語入力の要諦はやはり漢字である。FEPを補つて、漢字體系を縦横無盡に活用するマクロを夢見てゐる次第である。

役に立つミニ情報 (1)

女性学研究者のための国際的な議論を高めるための電子メール・グループができました。設立者はJoan Korenmanで女性学研究的進め方についての専門的なアドバイスを提供します。その他カンファレンスや集会の案内等を得ることもできます。グループは同時に大学で使われている教科書や資料、文献リストを紹介し、関心のある方は下記に問い合わせ下さい。

E-mail: korenman@umbc.bitnet

理事会議事録

日時 : 4月23日(木) 18:00~20:30

会場 : 凸版印刷株式会社 本社6階サロン

出席者 : ①当日出席者 米田、月見里、藤原謙、石塚、岩田、名和、松田、菅原、安澤、芦崎、長瀬、次田

②委任状提出 矢戸、有川、三浦、開原、中山、田隅、近藤、江成、加藤、黒澤

議事 :

- 1) 開催宣言(米田会長)
- 2) 前回の議事録の承認(事務局) …前回の議事録について承認を得た。
- 3) 部門報告

①<企画部門>(藤原副会長、事務局)

- ・昨年11月実施したシンポジウム、今年3月に実施したフォーラムについて簡単に報告

②<ニューズレター編集>(長瀬編集担当)

- ・「やまぶき」を13号より使用したが全頁使用できず、二段組の記事2本についてのみSGMLで入力。
- ・執筆要項を変更。SGMLのタグの仕様を変えた。

③<論文誌編集>(藤原副会長、芦崎編集担当)

- ・入稿完了、校正も終わりそうであるが、やまぶきの欧文対応能力が全く無く、ハイフォネーションは手作業となってしまう。そのため欧文はデフで処理しているがこちらも余りうまくいっていない。総会と同時に出来上がるような日程ではないかと思う。

④<コーデータ部会>(次田会員、事務局)

- ・コーデータ協会の国際会議を1996年筑波において開催される事となった。準備委員会が6月に実施される事となったが、準備金として10万円の予算を認めて頂きたい。
- ・次田先生のところでコーデータ部会の事務局を引き継ぐ前のお金は行方不明で調査しても判らなかった。

4) 会計報告(事務局)

- ・別紙資料に基づいて報告
- ・前事務局より郵便口座の出納資料を受領、検討したところ用途がはっきりしないお金が計885、610円あった。理事会の雑費などのために使用したものと考えられるので、前事務局に領収書を発行してもらい処理をする事とした。(会長、副会長と相談済み)
- ・予算案を前年度の実績に基づき作成した。・今年度の会費の納入状況について報告
- ・日本物理学会から無料広告の掲載案内が来ていたが、広告掲載のためのフォーマットを作りたい。(月見里副会長) 作った方がよい。(米田会長)
- ・論文誌の部数の件だが、増刷を作らなくてはならずお金がかかる。又、部数は2000部という事だが…印刷をお願いする大日本印刷から(大日本印刷の)広告を掲載させて欲しいと言われているが…(芦崎)
- ・2000部でお願いして欲しい。(藤原副会長)

5) 今後の運営について

- ・情報知識学会として何をすべきか。(米田会長)
- ・広告フォーマットを作り、学会相互に連絡し合えば宣伝は比較的簡単ではないか。(米田会長)
- ・会員増強のための広告であるとか案内とかのマテリアルが必要。会員の増強のための委員会を作りたい。組織的にして責任の所在を明確にする必要がある。(米田会長)
- ・亡くなった益子さんが設立総会の時に質問していたが、当学会のコンセプトは何か。コンピュータなのか情報学なのか明確にしないといけない。(月見里副会長)

6) 総会準備

- ・事務局で総会に必要な議事について簡単にまとめてみた。(月見里副会長)
- ・役員の改選は今年は実施しない。開催日時であるが5月実施は無理。9~10月に実施する事にして講演会を同時に開催したらどうか。予算は理事会で超法規的に承認してもらえば良い。(米田会長)
- ・総会は9月17日(木)に実施したい。それまでに同時開催する講演会のアイデアとか学会のコンセプトを明らかにしなくてはならない。全理事に募ってアイデアを出して頂きたい。
- ・次回の会合では総会の講演会や学会コンセプトについて6月の中旬に理事懇談会という形式で実施をしたい。日程は副会長と相談して決定したい。会員の増強委員会については次回に決定したい。

(斎藤記)

学会カレンダー (Ver.4.0, '92)

IEEE Int'l. Conf. on Robot and Human Communication, 法政大学, 1992,9,1-3

Seminar held by ICSSID,1992.9,7-14、

詳細及び問い合わせ先：一橋大学経済研究所（松田芳郎：Tel(0425)72-1670、
Fax(0425)75-4856）

情報処理学会「人文科学とコンピュータ」、国立教育研究所, 1992, 9, 11

問い合わせ先：日本IBM（株）東京基礎研究所（洪 政国：Tel(03)3288-8280,
Fax(03)3265-4251）

2nd International Conference & Exhibition on Computer Applications to Materials
and Molecular Science and Engineering(CAMSE '92), Yokohama, 1992,9,22-25
Call for papers(deadline 1992,2,29)

5th Irish Conference on Artificial Intelligence and Cognitive Science

University of Limerick, Ireland, 1992, 9, 10-11

Contact: aics92@ul.ie

情報知識学会総会 1992,9,17,（詳細は本号1-2頁参照）

Conference on Computational Lexicography and Text Research, Budapest, 1992, 10, 4-8

Contact: Hungarian Academy of Sciences, Institute of Linguistics, Budapest, P.O.
Box 19, 1250 Hungary

Society for Literature and Science Annual Conference, 1992, 10, 8-11

Contact:Pamela Gossin, History of Science, 601 Elm, Room 622
Univ. of Oklahoma, Oklahoma 73019

ICEBOL6,Dakota State University,1992,10,15-16,

Contact:E.Johnson,E-mail ERIC@SDNET.BITNET

55th AIS Annual Meeting, Information Management on the Move,

Pittsburgh, Hilton,1992, 10,26-29

Contact: Dr. Julie Hurd, University of Illinois at Chicago,
3500 Science and Engineering S.,Bos 8198, Chicago,Illinois 60680

EDUCOM792 --Charting Our Courses(Setting a National Agenda for Information Technology
and Higher Education)

Contact: Diane Balestri. Conference Chair:

EDUCOM'92 P.O.Box 66, Hopewell , NJ 08525

E-mail:EDUCOM92@EDUCOM(Bitnet)

情報処理学会「人文科学とコンピュータ」、中京大学, 1992, 11,27

問い合わせ先：日本IBM（株）東京基礎研究所（洪 政国：Tel(03)3288-8280,
Fax(03)3265-4251）

Modern Langage Association (MLA) convention

New York City, 1992, 12, 27-30, Contact: P.Fortier,

FORTIE@UOFMCC.BITNET

情報処理学会「人文科学とコンピュータ」、鳴門教育大学, 1993, 3, 5

問い合わせ先：日本IBM（株）東京基礎研究所（洪 政国：Tel(03)3288-8280,
Fax(03)3265-4251）

ドキュメントの可読性と品質要件

大日本印刷(株)

江成 保徳

(前号のつづき)

5. ドキュメント品質向上への道

文書情報交換のための標準規格化の作業は着々と進んでおり、たとえばSGML、DSSSL、SPDL、FONTといった一連の体系や、ODAが築かれつつある。

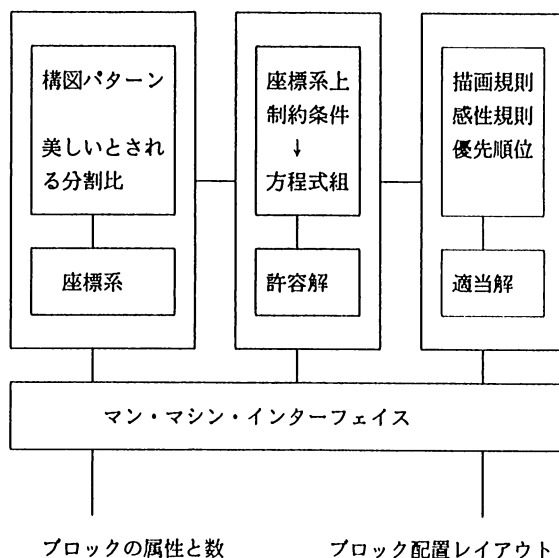
これらを本づくりとの関係でみれば、本の構成、組版、版下になるわけであるが、エンドユーザーにわたるシステムにおいてはアプリケーションとして、あらためて本づくりの常識的なノウハウを組込むべきである。

またそのレベルにも基本編から応用編の何種類かがあってもよい。さらにドキュメントの種類によるアプリケーションも考えられる。

たとえば禁止事項の確実な遵守、常識的な編集・組版へ導くガイドシステム、より高度な熟練者の知識ベースを持ったエキスパートシステムなどである。

一例としてレイアウト支援を行うシステムの場合は次のような概念図が考えられる。

(IGS研究会資料より)



いずれにしろ、著者自らがドキュメントを作成する場合は、あくまでも内容の知的作業を支援することが基本であり、見た目の可読性についてはこれまで、読む側の立場で常に見なれているこれまで述べたルール（実際にはほんの一部であるが）のシステム側のサポートが絶対に必要である。それは一種のエキスパートシステムとなる。

6. おわりに

パブリッシングとコンピューティングの世界の融合にともない、電子化データと電子機器による表示、出力がますます盛んになってくるが、現在は知らずに読み手に努力を強いるほうが圧倒的に多い。

先の可読性の研究の歴史の中にもあるが、この状態は、もしかしたら医学的な面での悪影響をもたらしているかも知れない。たとえそれほどでないにしてもあるレベル以下のドキュメント品質は、ビジネス効率の低下につながっているかもしれない。

このような現状の悲観的な捉え方はさておいて、読みたくなる、読みやすいことは誰でも望むところである。

これからのドキュメント作成機器は個々の機能の向上もさることながら、出版・印刷の基本哲学をエキスパートシステムとして組込むことを期待されるようになるであろう。

(完)

追悼

当学会理事で大日本印刷株式会社 A C S 推進本部副本部長であられました 江成保徳氏が 6 月 2 日（火）午前 4 時 10 分、胆嚢炎の為逝去されました。享年 45 歳でした。本号の御遺稿をもちまして氏の連続掲載記事は終了いたします。ここに改めて感謝の意を表しますと共に、謹んで故人のご冥福をお祈りいたします。

地球規模の社会経済体制の変革期における 社会科学文献情報検索の現状と未来

— 1992年9月8日・11日国際セミナー —

第2次世界大戦後、ソ連邦に続いて東欧圏や中国など社会主義国家の成立という社会経済体制の大きな変革が見られた。しかし約半世紀を経てソ連邦の解体、東欧圏諸国の経済体制の変化など再び大規模な社会経済体制の変動がみられた。

他方この半世紀は、書誌情報検索の側面では、国際的な書誌目録編集が組織化され、近年はさらに計算機の発展によってデータベース化され、オン・ライン検索が軌道にのってきた。

特に Unesco は、いわゆる東西両体制に架ける橋としての書誌情報の蓄積に協力し、1950年に International Committee for Social Sciences Information and Documentation (ICSSD) の設立と発展に努力をしてきた。

この ICSSD は、International Bibliography for Social Sciences を経済学、社会学、政治学、文化人類学の4分冊に分けて1955年以来毎年刊行して今日に至っている。1980年代に入って計算機可読型データベースとして編成を開始している。

今回一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センターが同大学百周年記念基金の援助を得て ICSSD とセミナーを共催することとなり、情報知識学会にも後援して頂ける運びとなった。

ここにセミナーの概要を記して、情報知識学会の会員の皆様の積極的参加をお願いいたします。

連絡先 東京都国立市中2-1 一橋大学経済研究所松田芳郎研究室
TEL. 0425-72-1101 内線 846 FAX. 0425-75-4856

プ ロ グ ラ ム

1992年9月8日(火) 1:30-5:30 公開セミナー 1992年9月11日(金) 2:00-5:00 公開セミナー
5:30-7:00 レセプション

会 場 国際文化会館講堂
〒106 港区六本木5-11-16
TEL. 03-3470-4611

会 場 京都大学附属図書館視聴覚講堂
〒606-01 京都市左京区吉田本町
TEL. 075-753-7531

尚、

9月9日、10日国際文化会館において非公開のセミナーがあります。

使用言語は英語です。参加希望の方は事前にご連絡下さい。席の可能な限り受け付けます。

公開セミナーの講演者では、現在の ICSSD の事務局長であるアーノルド・マルクス所長（オランダ SWIDC）が、社会科学文献情報の現状と将来展望について論じ、ICSSD の名誉事務局長のジャン・メリエ教授（フランス高等政治学院）が過去40年間の IBSS の歴史的検討を行い、タマッシュ・フェルジ博士（ハンガリー科学アカデミー、経済研究所経済情報部主任）が、これ迄の東欧圏の文献情報の国際協力の実態とその評価について論じる。また現在 IBSS の編集の統括をしているリン・ブリンドレイ図書館長（LSE、政治・経済学英図書館）が、IBSS データベースの現状について論じる予定である。東京と京都とでは、報告者の組み合わせが若干異り、京都では、勝村哲也助教授（京都大学人文科学研究所東洋学文献センター）による中国文献情報データベースについての特別講演がある。

公開セミナーの講演は、英語であるけれども、日本語の同時通訳がつけられる。

情報知識学会誌への投稿について

編集委員 芦崎達雄

1988年4月に発足した情報知識学会は1991年12月に第2巻の学会誌を発行することができました。内容は人文科学から自然科学まで幅広い分野を対象としています。

情報知識学会誌の第3巻の発刊に当たって、学会誌の投稿規定について、いくつか説明をしておきます。

本誌は、SGML(Standard Generalized Mark-up Language, ISO規格8879)で編集・印刷を行ないます。SGMLとは、文書情報の国際標準として、1986年10月に国際規格となったものである。SGMLでは必要な限り文字列を要素にグループ分けして、マーク付けし、構造化します。本誌では、標題、著者名、著者所属、要約、本文、文献リスト、注、表、図です。また原稿は、図や表以外の部分については、ワードプロセッサで作成し、そのフロッピーディスクと印字したもの2部を提出して下さい。

投稿を御希望の方は情報知識学会誌のVOL1・NO1・P97-98の投稿の手引を参照して下さい。

なお第2巻の内容としては、講演論文として、「情報社会の生態学」、「歴史系支援情報処理研究の基礎的課題」。解説記事として、「コンピュータ時代の数学教育」。論文としては、「SGML形式による学会誌全文データベースの構築と印刷」、「木版刷チベット文献の文字自動認識の試み」、「分散型材料データベースのためのインターフェイス開発」、「有機合成研究用の情報ベースシステムにおける学習および類推」、「材料データシステムの統合化」の4篇が発表されました。

情報知識学の対象分野は、下記の通りです。

①情報蓄積・情報解析(記述法、記述性、同定、

識別、管理可能性、信頼性、評価、安定性、など)

②情報構造(構成要素間の関係、分類法、分類表現、モデル、自己組織化:学習、内包:総称、類似性など)

③情報表現、媒体(言語、線形、二次元、多次元、加工、変換など)

④情報流通(標準化、シソーラス、辞書、案内、問い合わせ、機密、権利など)

⑤応用(データベース構築、知識ベースシステム、管理、検索、統合化、高次利用など)

⑥その他上記の理論、技術、応用に関連した課題

また取り扱う学問領域としては、下記の通りです。

哲学、国文学、法令、考古学、歴史、

経済、経営統計学、教育

分類学、用語、図書館情報学

物理、化学、天文、地学、生物、地理、数学

医学、薬学、体育学

工学、材料、宇宙・航空、制御、エネルギー、原子力

農学、環境

芸術、音楽

画像、メディア、出版・印刷

原稿は一行23字(全角文字)の30行でお願いします。原稿用紙約3頁で刷り上がり約1頁となります。論文は刷り上がり約10頁を目安として、原稿で30頁程度書き下さい。

原稿の締切としては、1992年9月30日を予定しています。

ニューズレター原稿募集

1991年度より情報知識学会のニューズレターの発行が年6回になり鮮度の高いニュースを掲載しております。

つきましては会員の皆様の原稿を募集します。内容は自由自在、“情報”を題材にしたものから、“情報”に関係の無いもの迄、特に指定はありません。

なお現在電子編集を行っておりますので原稿はフロッピーでお送り下さい。電子編集では岩波書店と大日本印刷が共同開発した文書作成システム”やまぶき”を使用しております。特に2段組原稿に関しては学会誌同様SGML方式を採用しております。残念ながらシステムの設定につきましては日本語ワープロは「一太郎(3.0)」対応ですので、それ以外のソフトを御利用の場合はタグを付けずプレーンなテキストをMS-DOSファイルで御郵送下さい。

学会の研究会やセミナー等の案内については一部オフセット印刷を併用しております。ワープロ・A4サイズで出力されたものを、そのまま御郵送下さい。

これまで通り、以下の記事は常時募集します。執筆ご希望、又はどなたか推薦したい方など御紹介下さい。

巻頭言

研究紹介、人物紹介

会員の随想、書評

学会ニュース・カレンダー

対談記事・インタビュー、学会出席報告

関連学会の開催案内、国際会議紹介

会社紹介・情報関係開発商品紹介

役に立たないミニ情報・役に立つミニ情報

****なお執筆者は現在のところ会員に限りますので、記事を書きたい方には「情報知識学会」への入会をお奨め下さい。

****法人会員のの広告も掲載致します。編集委員に御相談下さい。

****締め切りは変わりません。これまで同様、発行前の奇数月の20日です。

****下記の事項は必ずフロッピーと一緒に文書としてお送りください。(フロッピーには書き込まないで下さい)

掲載希望日：第	号	年	月	日	発行
氏名	：	所属：			
連絡先	：	〒			
		Tel	Fax		
問い合わせ・原稿送付先					

〒167 東京都杉並区上荻 4-4-5-101

長瀬 真理

TEL：03(3395)8168、FAX：03(3395)8608

編集後記：執筆者の皆様ご協力有難うございます。これで編集部もやっと夏休みです。“Bonnes Vacances!!!”
秋に総会でお目にかかりましょう。